

シンポジウム「受委託組織による良質粗飼料生産の現状と展望」

十勝南部地区におけるTMRセンターの現状について

(有)中島デーリィサポートの取り組みと地域波及効果

阿部 隆斉

The present condition of the TMR center in the southern Tokachi area

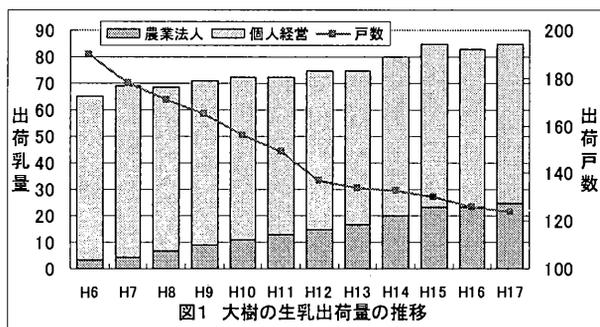
The measure and the local ripple effect of Nakajima-Daily-Support

Takashi Abe

はじめに

十勝南部地区は十勝の南部に位置し、南から広尾町・大樹町・幕別町忠類地区を担当している。農業形態は、夏期の海霧による照時間や積算気温に影響する地域のため、地域の農業生産の8割は畜産が担っている。畜産の主体は酪農で、共同経営も多数みられる大型酪農地域であり、日本を代表するメガファームも点在している。

しかし、酪農経営の大型化に伴い、家族経営の規模・労働力は限界に達しつつあり、地域では酪農の支援体制が求められている。酪農支援システムにおいては、粗飼料面は、コントラクタ。育成牛を哺乳期から外部委託できる哺育・育成利用組合などの酪農支援システムが構築されてきた。



酪農支援システムの1つとして、(有)中島デーリィサポートの所在する大樹町中島地区は、大樹町より南東へ約15km、太平洋までは約2kmに位置し、海霧の影響で、牧草収穫はダイレクト収穫、サイレージ用とうもろこしの大半はマルチ栽培を行っている酪農専業地区である。

1 設立背景

大樹町中島地区は13戸の酪農家から構成し、ハーベスタ利用組合による共同作業8戸と民間コントラクタ2戸及び個別完結作業3戸で作業を行っていた。

酪農経営は、一戸当たり作付面積50%と町内では大型であるが、近年、乳牛の飼養頭数増加に伴い、粗飼料収穫は「品質・労働」が大きく低下し、経営負担となっていた。この現状を改善するために、中島地区酪農部会と地域関係機関は、地域の課題を整理した。

<中島地区の課題>

サイレージ貯蔵施設の整備の遅れ等のため、収穫作業に時間を要し、収穫作業期間の長期化による栄養収量の低下を招いていた。そのため、経営及び労働に対して大きな負担となっている。

- ① 労働力不足 (作業の長期化による家族負担)
- ② 施設・機械の不足
- ③ 過重労働からの改善意識の低下

これらの課題を解決するために、家族経営を基本とした分業化による新たな生産システムを模索し、「TMRセンター」設立に向けて検討を行った。

2 中島デーリィサポートの概要

(1) 設立経緯

平成11年8月に、中島地区酪農部会でTMRセンターを視察してから、4年間の検討期間を要し、地域と関係機関が一丸となり検討を繰り返し行ってきた。その間、地域主体の検討会から、目的集団へと変わり支援してきた。(表1)

表1 中島デーリィサポートの主な経過

H11. 8	中島地区酪農部会 視察
H12. 2	同部会 TMRセンター学習会 13戸
H12.10	事業申請(該当事業なしのため断念)
H13. 4	TMRセンター検討会 13戸
H13. 9	オコッペフィードサービス視察
H13.12	酪農部会 学習会要請
H14. 1	再検討開始 9戸
H14. 4	TMRセンター合意農家6戸 家族説明
H14. 4~	設立検討会(30回~)
H15. 1	(有)中島デーリィサポート設立
H15. 6	1番草収穫
H15. 7	TMR供給開始(仮設)
H15. 8	落成式及び本格供給開始
~	
H18.11	道TMRセンター連絡協議会副会長就任

表2 (有)中島デーリィサポート

所在地	大樹町字中島106番地	
設立	平成15年1月22日	
構成農家	6戸 出荷乳量3,800t	
飼料供給	経産牛	400頭 育成牛 300頭
飼料面積	採草地	210ha
	飼料用とうもろこし	55ha
コントラ	採草地	170ha
	飼料用とうもろこし	48ha
主な施設	バンカーサイロ	14基(36m×10m×2m)
	飼料調製庫	400m ²
事務所		
導入した	自走ハーベスタ	428ps
主な機械	ミキサーフィーダ	14m ³
	サイレージ取り出し機	
	モアコン	

(2) デーリィサポートの概要

平成15年1月22日に「(有)中島デーリィサポート」を設立し、同年7月11日よりTMRを供給している。構成員6戸8人体制で圃場作業を行い、専属従業員1名が毎日のTMR調製及び配送を行っている。酪農経営は、様々の技術があり、全てを習得するには大変な労力がかかるが、各部門毎に担当者を配置し、組織的な運営を実践している。(図2)

3 活動の成果

(1) 飼料給与作業の軽減

給餌方法は、移行前の分離給与時は牛舎を平均10回以上の給餌を行っていた。TMR給与によって、牛舎の給餌回数が大幅に減り、給餌に係わる労働面・時間の減少することとなった。(表3)

毎日の飼料給与のなかで、サイロから牛舎まで運搬することは、気象や時間的な拘束などから大きな負担であった。TMR配送により、「定時・定量配送」によって、肉体的な負担だけでなく、精神的な負担が大きく軽減された。(図3)

表3 TMRセンター移行による給餌回数の変化

飼料名	A牧場		E牧場		F牧場	
	前	後	前	後	前	後
配合飼料	5	3	4	2	4	2
グラスサイレージ	2		3		2	
コーンサイレージ	1		3		2	
ビートパルプ	1	3	2	2	1	4
単味飼料	1		1		4	
ビタミン	1		1		1	
ミネラル	1		1		1	
給餌回数計	12	6	15	4	15	6

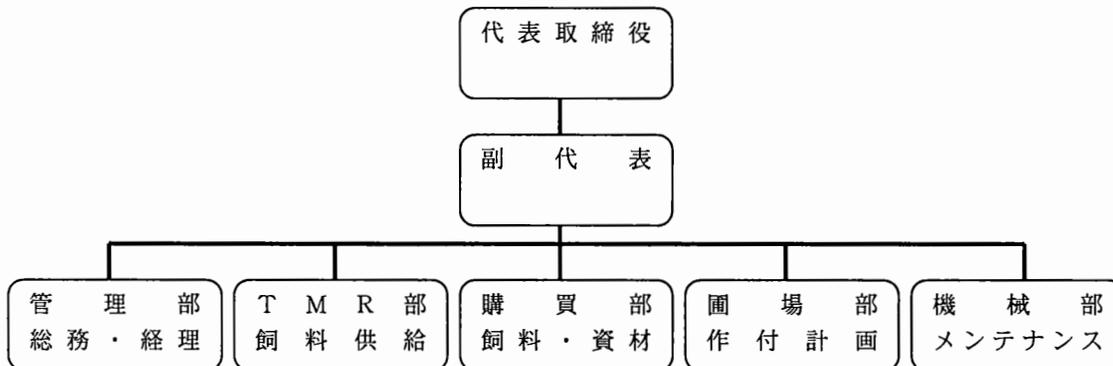
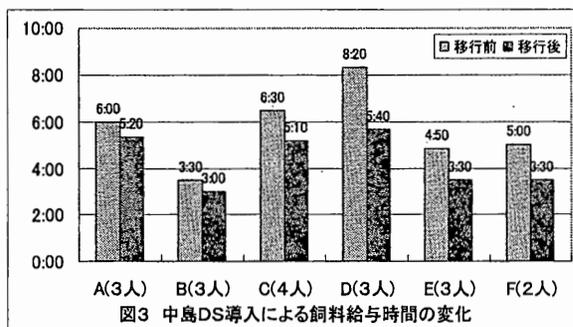


図2 (有)中島デーリィサポート機構図

(2) 圃作業効率の向上

従来、牛舎作業を終了してから、共同作業を開始していたため、農家個々で集合時間に差があり、作業開始時間が遅れていた。

また、スタックサイロ主体のため、圃場での収穫が可能であっても、貯蔵場所の状態で収穫作業を行えなかったこともあり、結果として、町内でも収穫作業の最も遅いグループであった。

TMRセンター移行により、ハード面では大型バンカーサイロの整備や大型機械の導入を行い、作業効率の向上が図られた。

ソフト面は、大樹町コントラクタ協議会と連携し、運搬ダンプやオペレータ等の外部支援を積極的に活用した。

TMR供給によって、飼料給与時間が短縮化されたことにより、構成員と家族が協力して作業を行い、短時間で作業することが可能となったため、適期収穫に対する意識の向上及び短期間による調製作業が可能となり、粗飼料の品質向上が図られた。(表4)

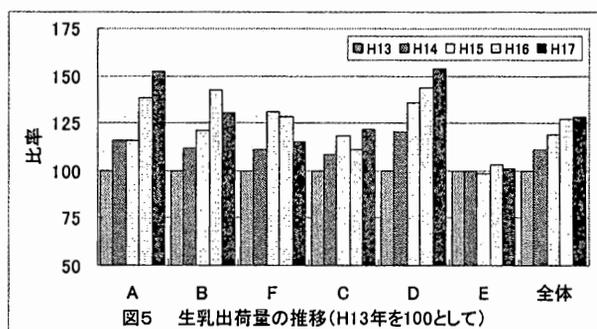
表4 TMRセンターの収穫作業(自走ハーベスタ分)

収穫作業	中島		収穫面積 ha	作業効率 ha/日	移行作業	
	DS	受託			収穫	効率
1番草	210	35	245	27.2	198	15.0
2番草	120	100	220	0		
コーン	55	48	103	8.9	10.2	6.0

(2) 生産効率の向上

生産面では、TMRセンター移行前と比較すると、出荷乳量は、検討前の平成13年と比較し、移行後の平成17年で128%増加した。TMRによる個体乳量の増加と粗飼料の品質向上、そして、労働・精神的な「ゆとりの創出」が主な要因と考えられる。(図5)

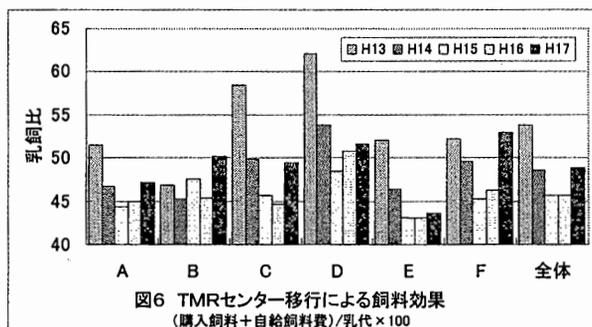
機械の所有と維持費は、移行によって、「共同作業+個人収穫」体制で各戸が所有していた低稼働機械は、組織所有として、機械の残存価値を考慮しながら、



中島デーリィサポートに引継ぎを行い、余剰機械は、各自処分して、設立に向けた資金とした。そのため、低稼働機械による維持管理費を大きく圧縮させた。(表5)

機械名	個人所有	移行後
トラクタ	20	7
ダンプ	5	2
モアコン	6	2
テッタ	11	3
レーキ	8	2
ロールベアラ	6	2
ラッピングマシーン	6	2
ブラオ	4	2
プロキャス	4	2

事業効果としては、粗飼料の適期収穫及び自給飼料費の見直しによって、乳飼比(購入飼料費+自給飼料費)/乳代と比較すると、54%弱から46~48%で推移するようになった。このことは、各構成員にとって、経済効果をもたらしている。(図6)



(4) 草づくりの意識

TMR供給当初、サイレージは各戸のスタックを順番に調製・給与した。結果、スタックの利用率・サイレージの発酵品質と泌乳性に各構成員・圃場による差が大きさを感じた。従来、共同作業を行っていたことで、各戸のスタックサイロはどの圃場から生産されたものかは概ね理解された。そのため、優占的に草地更新を実施した。

また、さらなる粗飼料の品質向上、コスト低減に向けて「土壌分析」を実施し、地域の土壌を数値的な把握に基づいた見直しを行っている。(図8) 土壌改良材の積極的な施用や施肥の改善が実践されつつある。

TMRセンターの移行によって、以上のような効果が生まれてきた。構成員とその家族にとって、労働・精神的なゆとりが出てきている。